

神様に結ばれる家族への道

創世記 37 章 12 節～36 節

2025 年 10 月 19 日

松田 基子師

私たちは日々の生活に追われ、その日その日をこなして行くことで、月日は矢のように過ぎて行きます。そういう人生を送って来て、自分は一体、何を大事にして生きてきたのだろうか、信仰生活を大事にしてきたつもりだったけれども、それは神様の御心に適っていたのだろうか、と、そういう思いにさせられるのは、人生も終わりに近づいた時で、やっとそんな思いになるのですが、人生とは振り返る時に、なんと後悔が多い事でしょう。

後悔の多い人生、それは自分一人がその結果を負って行くものではありません。共に生活し歩んで来た家族、周りの人々に影響を与えています。

特に子どもたちへの影響は大きいものです。それが子どもたちの人生を生かすものであれば良いのですが、なぜか子どもは自分に似て欲しくないところが似るものです。

ここで考えなければならないことは、与えられた人生において、私たちは一番大切な家族に、神様の真実と愛を日々の生活の中で証しして、神様に結ばれる家族づくりに努めてきたかどうか、ということです。

そのことで考えさせられる家族があります。ヤコブの家族を見る時に、親の責任の重さを感じると共に、神様の憐れみと導きの確かさも知ることができます。

さて、そのヤコブは危機に際しては神様に立ち返し、神様を堅く信じ、神様を心から敬う信仰者でした。しかし彼のその信仰は、その生涯を振

り返る時に、彼一人の信仰であって、家庭生活の中に、実生活の中には生かされていなかったことが、争いの絶えなかった家族関係から浮かび上がってきます。

ヤコブは知力、体力を尽くして働き、何よりも神様の後押しがあって、多くの家畜を所有する資産家となりました。そんな彼にとって、財を増すことが何よりの目的となり、家庭の事には配慮が無く、自分の好みのままに家族に接していた事が分かります。

37 章 3 節を見ますと

「イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった」とあります。

ヨセフは 17 歳になっています。古代において 17 歳の男子は重要な働き手です。ですから、彼も一応、牧羊者見習いはしています。でも明らかに特別扱いされていることは、父親から裾の長い晴れ着が与えられている事から分かります。

晴れ着は特権を与えられた者への証明でした。ヤコブはヨセフを後継者とすることを表明しているようなものです。晴れ着を着ては、労働はできません。ヨセフは羊飼いの見習いはしても、厳しい羊飼いの仕事は免除されているのです。ヤコブがヨセフを偏愛する日常は、10 人の兄たちにとって、とても不愉快なものでした。

子どもはどの子も親から愛されたいという、その心が満たされて初めて、自分は愛される価値ある人間なのだという安心感が生まれ、自分は自分で良いのだという自信が持てます。でも父親が子どもたちの内、一人だけを偏愛するなら、他の兄弟たちは、**「あの子だけが父の愛情を独り占めして、特別扱いを受けている。自分たちも愛されるべきなのに、あの子のせいで自分たちは不当な扱いを受けている。あの子が憎い」**と

いう思いになります。

ヤコブのヨセフへの偏愛は、兄たちにヨセフを憎ませ、「彼と穏やかに話すことも出来なかった」というところまで、関係をこじらせていました。

問題の深刻さは、偏愛の元凶であるヤコブが、この根本問題に全く気付いていないことです。確かに古代社会においては、家長の特権として、自分の思いのままに振舞える社会であったでしょう。人権意識など、全く考えも及ばなかった時代ではありますが、人間の本質は同じです。今日に通じる問題が提示されています。

ヤコブは最愛の妻ラケルを失ってしまいました。彼の喪失感は相当のものだったでしょう。ヤコブはもともと年寄り子のヨセフが可愛かったのですが、ラケルを失った喪失感は癒し難く、ラケルが産んだヨセフを偏愛することで慰めを得ていたのです。

家族を自分の好みによって差別することは、相手をどれほど傷つけることでしょうか。ヤコブはそのことに気付きませんでした。彼の自己中心による偏愛の故に、ヨセフは彼から引き離されなければならなかった。

神様はヨセフに目を留められ、彼に夢を与えられました。彼は見た夢を兄たちに聞いてもらいたいと思い、兄たちが集まっている所で、「兄さんたち聞いてください。わたしはこんな夢を見ました。畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上り、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました」と嬉しそうに話しました。内容は明らかにヨセフが立派になって兄弟たち皆を従わせるということです。兄たちがこういうことを聞いて嬉しいはずがありません。それが分からないヨセフで

した。

その話を聞いた兄たちは「なに、お前が我々の王になるというのか。お前が我々を支配するというのか」と怒って言い返しました。8節には

「兄たちは夢とその言葉のために、ヨセフをますます憎んだ」と記されています。兄たちは自分たちが侮辱されたと感じたのです。

ヨセフは兄たちが自分の話に怒りを表したにもかかわらず、又々、自分が見た夢を兄たちに話しました。「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と11の星がわたしにひれ伏しているのです。」兄たちはそんな話を聞きたくありません。相手にしてくれなかったでしょう。

ヨセフは父にも話しました。するとヤコブは「**一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか**」と言ってヨセフをたしなめました。

11節には

「兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた」と記されています。

ヤコブも神様から夢を与えられた人物でした。彼はヨセフの夢に神様の御心が示されたのかもしれないと、心にかかったのです。

そんなことがあって後、10人の兄たちは羊を追って遊牧の旅に出かけました。その行く先は約80キロ先のシケムを目指しました。牧草を求め、羊や山羊を養いながら、北へ北へと向かいます。相当数の日にちを要します。

何日も経ってから、ヤコブは息子たちや家畜の様子が気になりました。そこでヨセフに様子を見に行かせることにしました。

ヨセフは例の晴れ着を着て元気に出かけました。シケムまで無事に辿り着いたのですが、シケムの野原に兄たちの姿を見つけることは出来ませ

んでした。さまよい探していると一人の人に出会い、その人は兄たちの一行が更に北へ約 20 キロ先のドタンへ行ったことを教えてくれました。ドタンは地中海沿岸をエジプトへ通じる「海の道」への内陸部からの通過地点です。ヨセフは兄たちの居場所が分かって、元気を出してドタンに向かいました。

先に気が付いたのは兄たちの方でした。

18 節を見ますと

「兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ相談した」とあります。兄たちのヨセフに対する憎しみは、命を奪わずにはおれない程までに達していました。

憎しみの怖さは、相手を抹殺するまで、その思いが治まらないところにあります。

兄たちは言いました。「おい、向うから例の夢見るお方がやってくる。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えばよい。あれの夢がどうなるか、見てやろう」と勢いづきました。

父ヤコブの前では決して言えない、そんなことはできない相談です。彼らには父への信頼が無かったことが分かります。父への信頼がない子どもたちは、父が信じる神様への信頼もありませんでした。彼らは神様の存在、支配を畏れる心を持たず、神様がヨセフを導き、用いようとしている御計画の前に立ちはだかって、「**ヨセフの夢をつぶしてやる**」と意気込んだのです。彼らは自覚のないまま、なんと、神様に齒向かってしまったのです。

そんな兄弟たちの企みに、ルベンはずがに長子です。「**血を流してはならない。荒れ野のこの穴に投げ入れよう**」と提案しました。ルベンは後で助けるつもりです。話はまとまりました。兄

たちは一団となってヨセフを待ちました。

ヨセフは兄たちの姿が見えると、喜びに溢れました。100 キロ以上も歩いて来て、やっと兄たちを見つけたのです。嬉しくて駆け寄りました。

ところが兄たちはヨセフを捕まえ、晴れ着を剥ぎ取り、空になった水溜め用の穴に放り込んだのです。その穴は岩を掘った深い穴で、自力で這い上がることは出来ないものでした。

ヨセフは兄たちの思ってもみなかった仕打ちに打ちのめされました。彼は「**助けて！**」と叫びました。しかし、神様を畏れることのない兄たちは、兄弟愛の心を失い、ヨセフの悲痛な叫びに耳を貸さず、非情にも平気で食事を始めたのでした。

すると、向こうからエジプトへの街道「海の道」に向かう隊商の一隊が見えました。聖書には、その一隊がイシュマエル人だったのかミディアン人だったのか入り混じっているのは、2 つの伝承を記したためだとされています。

ユダは隊商の一行を見て、ヨセフを彼らに売る事を提案しました。皆が賛成すると、ヨセフは穴から引き上げられ、銀 20 枚で隊商に売られてしまいました。ヨセフはエジプトに連れて行かれ、奴隷として売られるのです。

17 歳にして人生のどん底に突き落とされたヨセフ。外国の地で、奴隷とされる人生に絶望しかありません。今まで父ヤコブの愛を一身に受けてきたヨセフでしたが、もはや誰の助けも得られず、誰も味方してくれる人はいません。

不安と絶望に押しつぶされそうになったヨセフに一筋の望みが湧いてきました。彼はヤコブの偏愛を受けましたが、父の側にいつも居たことによって、神様を知り、神様の偉大さ、導き、守りを信じることができたのです。この後、ヨセフの唯一の拠り所は神様です。神様も働いてく

ださいます。

一方、兄たちはヨセフの晴れ着に山羊の血を塗り、偽装工作をして、父ヤコブにヨセフは野獣に食い殺されたのだと思い込ませました。ヤコブの悲しみようは、死に等しいものでした。兄たちは、やっと自分たちが犯した罪の大きさ、取り返しがつかない事をしてしまったことに気が付いたのでした。彼らはその罪の負い目を負って、この後の人生を生きて行かなければなりません。

人間とは何と罪深いのでしょうか。このような事態に陥った要因はヤコブにあります。それは彼が父親として、子どもたちに対する責任で一番大事なことである、子どもたちに神様を示し、神様に従うことを教えることに真剣に向き合わなかったところにあります。彼は神様を崇めることには熱心でしたが、実生活は家長の権威に座して、自分の好みのままに生きた人でした。確かにそういう時代ではあったでしょう。しかし、そこに信仰と生活の不一致がもたらす罪が示されています。

さて、人権が叫ばれる今日の時代においても、生まれながら自己中心に生きる人間には、家族であっても、人間の尊さ、誰も愛されるべき存在であることが分からないでいます。そのために自分の好みが優先してしまいます。その結果、差別や排除が起こり、そこから憎しみや復讐心が生まれます。

イエス様は、それらの全ての罪を負って十字架にかかり、御自身の命をお与えになりました。全人類を贖ってくださいました。このことは、誰の命も御子イエス・キリストが命をかけて愛しておられる、それほど尊いものであるということの証明でした。このことが分かって初めて、自分自身の、家族の、他者の尊さが分かり、尊び愛する心を持つことができるのです。人が最も知

るべきことはこのことです。

しかし、信仰を持ちながらも、私たちは不完全な救われた罪人であり、過ちを繰り返してしまいます。私たちは日々、まず自分自身がイエス・キリストの十字架の苦しみで与えられた命を生かされていることに感謝して、心碎かれ、自分の不完全さ、愛の足りなさを神様の前に悔い改め、家族に仕えましょう。そして家族の皆が、イエス・キリストにつながり、キリストの愛に生きて、互いに尊び合い、愛し合い、助け合う、神様に結ばれる家族となるよう祈り求めて参りましょう。

お祈り致します。

憐れみ深い天の父なる神様。

自己中心に生きてしまう私たちは、家族であっても真の愛で愛する力の無い者です。そのために家族を、周りを、傷つけていることをお赦し下さい。

イエス・キリストの愛に心碎かれて、信仰の真実と愛を証ししていく者とならせてください。

お一人おひとりの家族が、神様に結ばれる家族となりますようお導きください。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン。